

より良く生きる ― 出居清太郎先生の世界 ― 第23回

山本博也

清太郎少年は追い越しながらそう声をかけました。するとその青年は言いました。

(1)「あっちも降っているよ」

あるとき、清太郎少年は街からの帰り

道、にわか雨にあいました。急ぎ足に帰っている、同じ道を歩いていく一人の青年があります。傘もささず、帽子もかぶらない頭を雨に打たせるままに、ゆつくり歩いているのは、隣村の青年です。いつも口の辺りに人のよい笑いを浮かべているこの青年は、村の人たちから侮られ、バカにされていました。

よ。

「早く帰らないと濡れてしまうよ。」

「ありがとう、でもあっちも降っているよ。」

そして相変わらず満足そうな笑みを浮かべて、同じゆつくりした歩みを続けるのでした。

清太郎少年はその晩、床に入ってから、ふとあの青年の言葉が思い出されました。雨の中を傘もささず、着物も濡れるにまかせながら、人がどんなことを言おうと、自分の行く道はただ一筋と思いつめたように、急ぎもせず、遅れもせずに

悠々と歩いて行く、その青年の姿がはつきりと浮かんできたのです。

「あつちも降っているよ」

人は目の前の苦しきから逃れたい一心で、もがきにもがき、焦りに焦るが、雨が降っている時は、あわててみてもあつちも降っているのだ。清太郎少年は、この、皆にバカにされている青年の、静かな言葉と静かな歩みを考えているうちに、突然、一つの啓示を受けたように思いました。あの静謐で着実な歩み、あれこそ自分に示された、自分の、道を歩むべき姿ではないか。

清太郎少年はその時初めて、目に見、耳に聞こえる、何気ない人の動作、言葉の中にも、明らかに自分に示される尊い教訓が含まれていることに思い至つ

たのでした。

〔『出居清太郎先生伝』から〕

たまたま出会った人の言葉と行動から、自分が生きていくうえでの大事な教訓を汲み取る—こういう感性、資質を生は少年時代からもつておられたということでしょう。

「あつちも降っているよ」—ふつうは聞き流してしまうような何でもない言葉です。そこから教訓を読み取ることができたのは、何からでも学ぼうという気持ちがあつたからではないでしょうか。

ずぶ濡れになるにまかせて歩く人の姿、しかも皆にバカにされている人の姿から教訓を汲み取ることができたのは、誰をも尊び愛する、謙虚な心だったからではないでしょうか。

(2) 人から言われたことが気になるのは

人から言われたことが気になるのは頭が高いのである。低い心でいれば、「そうですね、有り難うございます」と、心から感謝で受けられるのである。

(出居清太郎先生の言葉から)
人から言われたことが気になる、というのは、その言葉にとらわれ、動揺し、

どうしていいかわからず迷い、悩む、そういう状態でしょう。そうなるのは、「頭が高い」からだ、先生はおっしゃっています。

高い心で相手を見下し、相手の言葉を否定するけれど、やっぱりその言葉が気になり、動揺します。低い心で、「そうですね」「そうですね」と受け入れれば、心が落ち着き、冷静に対処できます。

人の言葉が気になるというのは、「雑音に拘泥」した姿でしょう。相手の言葉が雑音だから私が気になり、迷い、悩むのではなく、私が気になり、迷い、悩む言葉が「雑音」だということでしょう。

(3) 「なぜこの人は言うことを聞かないのだらう」



シジュウカラ 大西 恵

私たちは毎日のように経験しております。「なぜこの人は言うことを聞かないのだろう」「なぜわからないのだろう」と。

それは、自分自身に、聞かないところがあるからであります。自分自身に知識の足りないところ、徳の足りないところ、不平不満の浄化できないところがある。それを教えてくださっていることに気がつかない。

(出居清太郎先生の言葉から)
家庭でも職場でも、言うことが聞いてもらえないことは多々あります。その理由は常識的に考えてもいろいろあります。要求が正当でない、言うべき相手が違う、タイミングがよくない、等々。それはやはり、自分の言うことは通るはずだと、「頭が高い」のでしよう。

さらに根本的には、私が、人の言動や、動植物の姿や、自然の動きや、万事万端からの教えを「聞いてない」ことを反省しなければならぬのでしよう。

(4) 目の前に現われることのすべてが教えてくれる

多くの人がその言動によつて教えてくださる。鳥畜類も教えて下さる。地球の運行による春夏秋冬の変化が教えてくださる。さらにまた雨や風も教えてくださる。万事万端、私たちの目の前に現われてくることが魂を磨くための教科書であることを忘れてはなりません。

(出居清太郎先生の言葉から)